WASON
HQ
1104
J94+

Sept. '94
No. 395

明治十八年初刊

女學雜誌

毎週土曜日發兌

第三百九十五號

要目

朝鮮の教育制度

是れ、東邦協會の問に對して策したるもの、韓山の新政府、何如に其の國家的教育の制度を施行すべきや。吾黨の卑見、約して此の一篇に在り。

熊澤蕃山

近ごろ未だ蕃山の詳傳を見ず、茲に數回の號を重ねて太はだ有益の詳傳を掲ぐるものは、學問、性格、經歷、抱負、主義、評論、こまごまく在り。

女性と俳諧

俳道の女仙、此篇に於て、其の全豹を寫し盡さる。槿花一朝にしぼみ、井水一村に涸れ、彼女が限りなきの詩心は、千歳に至つて尚ほ生くるを覺ゆ。

時文片々

雪嶺善罵。白痴教育。正教會の文章。南洲翁遺事。護教生色あり。鼎軒書せず。北京に日章旗を樹し后何如。の諸文、片々よく時文を評す。

明治二十七年九月一日發兌

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

第三百九十五號目録

社説

戰時雜感(中)
壯語大抵究語なり
四千万人の團結斯の如し
護國の防壁を海外に作らんとするは
大日本は當に日本島に限るべし
眼を放てば亞細亞洲茫々焉たり
日本もし内に屈縮すれば
朝鮮の教育制度
を策して東方協會の問に對ふ
第二回、女子夏期學校

書ごゝろ

書の趣味(一)無光

論説

女性と俳諧(其三)秀野

書架

白痴教育
北京に日章旗を建し后何如
雪嶺善罵の新報
南洲翁遺事

正教會の文章
護教
鼎軒書せず
男女共學

文しらべ

家康老後の故(完結)

史傳

熊澤蕃山(駒田信夫)
緒言
蕃山の幼時
岡山藩に仕ふるより致仕に至る
近江聖人に謁す

時報

第二回女子夏期學校科目表○貧民女學校○裁縫科の副科(機業)◎貞婦の賞與○故山縣伯爵夫人の遺稿○女子の郵便局長○一大風俗史○長崎婦人會○濱町婦人團躰○土俗會

悲劇 魂迷、月中刄 (阿波寺鳴門左衞門著)
一名、桂吾良。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

明治二十七年九月一日發兌

第三百九十五號

社説

戰時雜感（中）

◎壯語大抵究語なり　胸ふるひて大言あり、心せばみて壯語多し。世上しば〳〵聞く所ろの爽快の議論は、未だ直ちに謳歌すべきものにあらざるなり。近來、論士、朝鮮を助くるの辭ばに云く、堤を以て水を防ぎ、壁を以て火を遮ぎる、朝鮮は須からく獨立せしむべし、決して之を收むべからず、當に我國の爲の堤壁となして、以て水火の大ひに到らんとするを遮防すべしと。嗚呼、これ何等の卑劣ぞや。內眞敵を懼れて、外、强大を裝ほひ、名を義戰俠援の譽れに假つて、而して、我を防衞するの方便となす、喩えば、人を捕えて矢を防ぐが如し、何等の汚弱ぞ。

◎四千万人の團結斯の如し　吾が此の大日本は、世界の何如なる强大國に對するとも、優に護國の戰に勝たん。もし百万の甲兵、來るとも、四千万人を以て之に對するに、何をか懼るゝ。たとひ、一千万人の來るとありとするも、吾國民は、尙ほ四倍の兵力を有するにあらずや。人は曰く、英佛の海軍强大なりと。左れど、何如なる大軍艦、大噸數ありと云ふと雖ども、廣袤二万四千七百九十四方里の面積ある一大軍艦の悠然として日本海上に浮ぶが如き海軍力は、世界万國中の何處にありや、此の一大軍艦に、四千万同胞の兄弟を乘せ、大元帥、万古一系の將權を握らせ玉ひ、四民皆な之が爲めに死せんことを冀ふ。如此き護國力あるもの六大洲中の何處にありや。吾大日本すでに斯の如し、此の神洲を防衞するが爲に、怯人、何の懼るゝことをかなす。左れば、

◎護國の防壁を海外に作らんとするは　勇に似て實は怯、聰に似て實は迂なり。城を築くものは、城に賴り、水に陣するものは、水を賴む。これを以て、良將は、水を背して陣し、人を以て城とす。こゝに於てか、人皆な死せんことを欲す。人

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

皆な死せんことを欲するは、即はち活くる所以にあらずや。然るを何んぞ、此の萬古動かざる山河を棄て、坤輿無數の、大鐵艦より出でて、故さらに韓山半島に神洲の防護を托せんとす。これ眞に國民を卑怯にするものにあらずや。

◎大日本は常に日本島に限るべし　此の美なる山川は、君父が鄕里なり。此の大和民族は、千古の同胞なり。此土、異境を交ゆべからず、此血、異族を混ずべからず。國家の大なるは、廣袤にあらずして、實力にあり、實力にあらずして、正義にあり。吾等大和の民族、將來正義の國粹を煥發して、宇内に聖臨し、高潔壯嚴の靈化を四方に施こすとあらば、則はち以て安んずべし。亦何んぞ、シーザー、ナポレヲンの暴野を學ぶことを肯んぜん。此故に、大日本が海外の事に着手するは、常に護國の爲めにあらずして正義の爲なるべし、私利の爲にあらずして、博愛の爲なるべし、偏狹なる國家問題の爲にあらずして、濶大なる人類世界觀の爲なるべし、一言するに、消極的の故を以て外交に從事するは、日本を小さくする也、日本は斷えず、積極的の道を以て外事に奮發せずんばある可らざる也。

◎眼を放てば亞細亞洲茫々焉たり　先づ以て朝鮮の獨立を計らざる可らず、其の憫れむべき國民を救護せざる可らず。左れど、日本の天職は、豈に之を以て終らんや。支那、未だ國を成さず、民族互ひに相爭そふ也、文明未だ行はれず、孔夫子の道義全く絕たり、大日本は、明の遺族を救助すると共に、愛親覺羅氏の開明に盡す所ろなかる可らず。シベリア地方、蒙古人種多し、而して歐魯の正義博愛なる人士、數多此の所ろに竄せらる、日本の義俠は到底之を放觀すべからず。印度の民、年々に大進步を爲す、獨立の氣象既に根底に鬱勃せり、日本の義俠は亦到底之を冷眼視すべからざる也。其他、シャム、ビルマ、の類、亦た之を度外視すべけんや。日本の正義を求むるもの多し、日本の抱負に委賴するもの多し、日本の天職、豈に重大にあらずや。

◎日本もし内に屈縮すれば　人心萎微として振はず、一と度び外に向へば、沛然として熾んなり。之れ日本の國粹の最大一者なり。君子曰く、内治まつて而して後ち外に向ふと。これ一の常經なりと雖ども、之を百事に適用すべからず。國民に國民の氣風あり、これ天職の掛る所ろ。日本人民は、即は

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ち常に外に向つて戰かふ所ろなかる可らざるもの也。甲東は曰く、內治而して后ち外交と。南洲は曰く、外交即はち內治と。吾人は、南洲に從はん。

朝鮮の教育制度、

を策して東邦協會の問に對ふ。

朝鮮の國家從來獨立の實なく、現に兵備と稱するに足るほどのもの無之、貧乏にして國力枯れ果たるにも拘はらず、殖產興業の道、毫しも開けず候。此度の新政府に於て、第一に着眼すべきは、此等巨大の國弊に有之候。而して、如此き國家の人民は、之と相應したる弊習を個々に染め居候者故、新政府が施行すべき國家的教育なるものゝ大方針は、此の弊習の洗脱と、之に反對する開發とを先一の要務と致すべきものと被存候。

又、獨立の實なき國民の學問は、兎角、文弱に流れ、模倣に走り易きもの故、此際尤とも戒しむべきは、只管ら文明國の學制に倣らひ、目下急用なき博學を誇らんとするなどの虛飾に有之、是れ第一の禁物に候。

小生の見る所に依れば、朝鮮新政府が、國庫支辨によりて施こす可き國家的教育の大躰は、兵式實業的教育とも稱す可きものに有之候。

即はち、獨立、勤勉、儉約、尙武、智識を慕ひ求むるの心を開發することを、第一の要務と致し、殖產興業と云へる新政府將來二十年の國是に對する習慣を養なふことを第二とし、右に所云る兵式實業的教育なるものを施こす事に候。

朝鮮人民、早熟、早婚の常態は、追々改革せしむべきものに有之候得共、未だ俄かに施こし難きものとして、其の學齡を六才より十四才迄といたし、六才より十才迄を小學。十才より十四才迄を中學といたし度候。

小學中學に於て教授すべき學科は、歷史、地理、數學、理學、讀み書、修身の六科に限り、其他は、兵式調練、及び實業の二つに定め申度候、小學と中學との相違は、學科の淺深高低のみに有之、但だ小學に於ては、諺文を教へ、中學に於ては、日本語を教ゆることいたし度、已を得ざるものは、小學丈けの卒業にて退學することを許可するの制度と定度候。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

右讀み書きとは、速かに讀本を作り、之を讀ましめ、又其字を習はするの工夫に候。

京城には、大學を開き、日本の尋常中學相當の學科を敎授し、市人の先輩、敎師、官吏等を養成することを目的といたし度候。

朝鮮新政府が着手すべき敎育制度は、此外に多く望むことを得まじくと存候。之とても、最初、たゞ主なる地方のみに施こすべきものと被存候。

敎師は、日本の有志者を薄給にて五年間招聘し、各所の各校ともに單級組織とし、併せて右敎員に其繼續者たるべき韓人の敎師を仕立せしむることに候。薄給とは、有志の獻身者を得んが爲めと、新政府の貧乏を察するとの主旨に有之。五年期限中の一年は、朝鮮語を習らふの積に有之、殘り四年をもつて、第一回の卒業生を出し度經綸に候。

第二回、女子夏季學校

滿腔の熱情をもつて、其の開校を歡こび迎ふ。

畫ごゝろ

畫の趣味(一)

無光

遠く端山を分け入り、人里絶えて鷄犬の聲も聞こえず、危しの鳥の音時に耳朶を掠め去るの時に於ては、如何なる人も一種崇高の感念を起さずんばあらず。百丈の蔦葉稀にして枝枯骨の如く、龍蛇の勢をなして千尋の崖に懸り、巖石苔むして太古の衣を着けたり。樹木の膚は巖の如く、爰に幾千年の齢を重ねて梢は天を摩せんとす、鬱葱として陽光を遮り、空翠充ち〳〵て人の骨を洗ふ。衣は何となく濕めり、肌はいつとなく粟立つ。瞑々として而かも淸く、凄暮として而かも暖かなり。

彼方に細き岩道をつたふて此處を出づれば、眼界開けて趣味一變す。前面に當て一體の嶺、頂きは白雲層々の中に隠れて大空も猶ほ低しとせん許り、黑綠の衣を穿ち泰然として立てる樣の、いかに余をして其前に拜伏せしむるよ。其右に在ものは

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

如何なる天魔の手になれるものぞ。斷岸萬丈の屏風を連ねて勢ひ地軸を貫かんとす。其左に在るものは平々凡々たる樣の又近つき難く、悠々として横臥せるは何たる大勇ぞや。一見是等の風彩に打たれて余を忘じ、羽化登仙下界を放れて中天に舞ひ、造化の手に抱かれて俗塵一粒づゝ余身より飛散し去り盡し、人間といふものを失ひ、智識といふものも、學問といふものも失却し終て、無極無限の境に入るを覺えず。忽ちにして余れに歸れは、茫然として失ふあるが如く、翻然として得るあるが如く、滿腔の氣を一時に吐きて、然る後、アヽの嘆聲を放ち、ドッカと石上に腰打ち据へて、深く天地の美を想はずんばあらざるなり。

其煙雨朦々雲漠々として、忽ち開けては忽ち閉ぢ、前後左右嵐氣に包まれて、身幽界に入りたらんが如く、深谷より起りて張り充つる雲の兵士は、八方より其旗を擧げて、或は暗く或は明かに、萬斛の氣焔を放て天上に登るもあり、輕きこと煙の如く平然として彷徨するもあり、消えては出で出でゝは消えて山を呑み山を吐く、山飛んで雲に入れば雲は身をそらして之を避け、反つて山を追ふて捕へんずるに山終に逃れ得ず、天を仰げども只其鼠色の大幕に蔽はれたるを見るのみ、谷に伏せども遠く瞳々たる水聲を聞くのみ、前後を望むに十數間の先きは其何たるを辨ず可らず、山として全形の見る可きなく、雲として唯全世界の朦朧たるを見るのみ、一も人間界に類する處のものあらざるなり。此時降雨少らく止みて、開けそめたる雲間より、繪に畫きたらん如き幾條の光線天界より落つれば、光景俄然一變。白き日光は雲に映じて麗はしきこといふ計りなく、其光の被むる處は今迄の有樣に引き更へて、事々物々明かに美はしく、而して其色の何ともいひぬ色々を帶べるを見つゝあるに、あれを見よ、彼方に懸けたる虹の橋、七種の光彩夢の如く幻の如く、心恍惚として醉えるが如く、身一躍して舊約創世記中の人物となり、大神が「光あれよ」と呼び給へるを見たらん心地せり。

山を過て余は海に行きぬ、濱の眞砂清ふして白く、如何なる女神の誰が爲にとてつくり給ひけん敷物ぞ、余等が穢れたる身を觸るとのおほけなさよ。磯馴松の振は奇しておもしろく、漁村の柳は緑の黒髮を垂れて地を掃らひ、海人が軒端半は傾けるに、前に干せる網どもいくつとなく立て連ねたるなどいは

ん方なし。網引くとて、村の老若男女の集りわめく聲も晴やかに、幾艘の小船いそがはしく漕ぎ廻り、異なる聲して此方に何やら言ひ知らするもをかし。海青くして果もなく、水天髣髴空に浮ぶは山か雲か。かなたに見ゆる遠山の藍色の衣を着けて、睡たげに横はるも何となく心樂し。いづこ行くらん眞帆あげてゆく船の、眞白に景中に立てるなど余も乘りて見たや、そよ吹く風に送られて遂に點一點となり、たゞよう漣に呑まれて、やさしや姿を隱しぬ。左より右に右より左に眸を一時に放て大觀すれば、天高く水遠し。大空は夢の如く白雲を浮べて睡り、日光嘻々として暖かく香る、海深さ幾千尋沆瀁たる波を湛えてこゝに天地を動すの力を貯へ、濃き群青の色に大地を包んで淡漫として際を知らず。優々たるかな天地、曠大なるかな造化の面。

怒號一番、猛虎天に吼え哮り、龍神角を鳴して海底に跳れば、黒雲墨を流して夜よりも暗く、閃々刄をひらめかして下界を衝き、怒濤逆卷き登て空中に冲り、時ならざる雪なだれ泡沫全世界を亂す。千仭の巖石今將さに轉じ去らんとし、廣漠たる大地も忽ちにして犯し終られんとす。天輪も爲めに環旋し、地軸も爲めに挺拔せん。岑嶺飛び上りて相擊ち、折れては渦卷きて深窟となる。驚濤雷の如く奔て駭水迸り散ず、乍ち開け乍ち會ひて蹙聚沸騰神失ひ魂消ゆ。天來の大風は羊の群に入る狼の如く、暴るゝに任せ狂ふに任せて、千年の神樹も根より奪はれ、大厦高樓も土臺より倒されんとす。雲奔馬の如く人を襲ひ、浪火焔の如く地を掠む。天鳴り地響きて世は魔界と化し終れるか。人間何とて智識を誇るや。汝それ何するものぞ。大神一度手を動せば世界は壞れ、日月星辰飛び失せなんず。大海の光景何ぞ壯なるや、何ぞ大なるや。

人間なるもの、深山大海に感化せられ、平生の優美といひ、剛勇といひ、偉大といひ、高尚といふもの、盡く飛び散り去て風の前の籾の如くなれる時、其心の眞底より出る、一の純潔にして雜氣なく、壯嚴にして卑心なき勢力を認るなるべし。人間は兎角物を考ふ。其狹き眼界小き智識を以て、蝸牛の廬を賴み角を爭ふ、樣々勝手の理屈を付て、以て天地の理を盡せるとす。識らず、宇宙の大精神に打れたる時、猶是等の小細工の汝の心中に存るものあるや。余等學問にあれ、技術にあれ、之を得むとする時先づ去て天地の心に參徹せんとを要す、全く余なる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ものを除き盡さゝれば眞正の余は出で來らざらん。余等天地に交りて、常に其の心の中に在るを得ば誠に幸なるかな、余が所謂眞心はこを指していふなり。此時人は邪念なく、猥情なく、思もなく、考もなく、誠の心に充たされて、活きたる生命の中に住するを得べきなり。眞の美とは、此眞心より湧き出づる清き泉をいふなり。高き畫家とは、此天然の力に同化して而して其力を畫幀の上に顯はすものをいふなり。

生れてより死する迄、日の出づるより日の入る迄、紙を拈り筆を弄して、過ぎ去れる古人の畫法を金科と賴み玉條と奉じ、流派の差別に眩惑せられて、眼界豆よりも小に、頭腦の働く處は其座する八疊の室よりも狹く、或は何も知らぬ學者の講義素人の駄評に心動きて、をかしき時の風潮に、梶を失ひたる小船の如く漂ひ、彼岸此渚に果かなき命を賴み、或は天然は美なり、大なり、高尚なりと叫べども、趣味もなき形骸に心暗みて、寫眞屋の足下にも及ばざるを頭痛に病む人等の、若しも此敷島の大和の國の明治の御代に有りもせば、余は是等の人に勸めんとす、『汝の筆を折り、紙絹を裂き、繪の具箱を打擲き、汝の臆病なる心を勵して、其痩せ脛に脚袢を付け、豆腐の如き足に草鞋を穿ち、菅笠を冠り、蓑を着て、深山を跋渉せよ、大海を逍遙せよ、雨に厭ふな、風に恐れな、春夏秋冬、十二月の雪、山に積らば獵師の家に籠居せよ、二月の暴風海に荒れなば、海人が住居に暫らく宿れ、然るときに、汝の臆病は大膽となり、汝の卑猥は高潔となり、汝の狹小は偉大とならん、而して其間に於て美の眞味を味ふることあらんなり。然る後、歸りて畫を作れ、實物の寫生もせよ、古畫も摸寫せよ、學者の說も聞け、人物畫も作れ、景色畫も作れ、花卉動物汝の嗜好に任せんのみ』と。

誠に余等果なきものなり、弱きものなり。余等畫を學ぶと雖ども、旣に畫といふ一種の魔物に擒にせられて、其牢獄を脫け出づる能はざるなり。始めに畫といふものゝ手段を學ぶは善きとながら、終りまで其手段といふものに縛せられて、其本を養ふとを忘るゝと、宗教家が儀式や經書の講義に迷ふて其道に歩むを忘れ、學者が書籍の解釋や古人の說に迷ふて其理を考ふるとを忘るゝが如し、素より物事は心計りでは成立たず、形なくては何の益にも立ざる事にもあれど、形は得易

く心は得難きものなれば、其心を得んことに工夫するは、最も大切なる事なり。近世より今代に至る迫々の通弊を察するに、或は丹青の末に走りて輕跳浮薄に赴き、或は古法古格に浸染して枯乾無味に陥り、或は空文空論を高尚と心得て、兒戯的のものを妙と稱へ、然らざれは新奇を弄び流行に投じて、發狂的、噴飯的のものを以て得たりと爲す。是世の趨勢、一概に罵倒し去て罪を畵工のみに歸すること能はずと雖ども、志ある人等は宜しく此等の潮流より放れて、別に眞の道に歩むことに潜心すべきに非ずや。されど畵を知らぬものが、如何に深山大海を觀察して其妙を味はんとするとも、決して畵術の心を覺り得べきに非ず。されば既に畵術を知れるものに非れば、依て以て其心を養ふに賴りなき也。畵家は畵家的に天地の美を感ぜざる可らず、然らざれば畵術上には益なき事となるべき也。余等は又愚なるものなり、鈍きものなり、微妙にして外に顯はれざるものに遇はば、容易に之を感得すること能はずして、其外形に迷ふを常とせり。彼の深山大海に交はるは、深山大海それ自身をのみ目的とするには非るなり。余等は遠く人寰を放れたる處に於て、總て他界の縁を除き盡して是等のものに對し、而して非常なる一の勢力に打たるゝこと、恰も使徒が復活せるクリストに遇へるが如くならんことを欲するなり。此時に於て、余等は畵道の眞味を覺るを得ん。此時、所謂畵術なるものを思ふものあらんや、余が嘗て心を籠めて摸寫せる古畵も、余が熱血を濺ひで作りし畵も、師に導かれて入りし畵道の法則規矩も、理論も技術も、美人の圖も勇夫の圖も、景色も花鳥も余より盡く奪去らるゝなり。恰も禪僧が、巖窟の中大樹の下に結伽趺坐して、直に眞如法印の堂奥に入るとき、雷の身邊に落ち、颶風の樹木を折るも聞かず、猛虎の牙を鳴し、毒蛇の舌を吐きて將に飛懸らんとするをも知らず、唯身心豁然萬法に參徹すること高暉の幽谷に臨むが如く、諸法を照了すること長風の大虚に遊ぶが如きに似たり。其時は、神物の有るありて余を開導するかの如く、諸々の差別を離れて絶對の畵の境に入ることを得べきなり。

斯して後余は世に歸らん、塵に交はらん、余市に美人を見るとき、余見るは、只に其明眸皎歯のみに非るなり、花顔柳姿のみに非るなり、余心に會し神に得る時、一道の神聖なる光明の彼身より出るを見る、臭穢なる乞兒に遇ふとき、余は其蝦蟇

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の如き肌蓬の如き髪水松の如き衣服黄色なる息の中より湧ける、清らなる一の泉を掬ぶを得ん。一輪の花の中にも萬類を包むの氣あるを見出し、一條の流の上にも滂湃たる大海を見出さん。血を流し肉を裂く武夫が慘澹たる光景に對しても、其中に含まれたる麗はしき心を見たり。紅塵万丈衆人喧噪せる市中の間に於ても、其中に充つる處の靜閑なる心を見たり。田家の農夫も高尙なり、北里の遊君も洒々たる趣を顯せり。世の所謂惡漢獰兒、如何で惡漢獰兒ならんや。余が山海の間に於て得たる處のものは、何處にも之を得るを得たり。天下の萬物盡く同一の大氣中に在るを識れり。是に於て畫眼を開て之を觀察するとき、如何なるものも畫趣を以て充たされたるを見たり。あらゆるもの皆畫家の好材料とならざるもの無きを見たり。而して其中には古今東西の差別なきなり。此流彼流の優劣なきなり。此心を以てせば如何なるものか高尙ならざらん、美妙ならざらん活動せざらん。

論説

女性と俳諧（其二）

秀野

わが假の寓居を蒼波樓と名づけて、品川沖の海風に嘯きしも、昨日今日と思ふ間に、早や五旬を經ぬ、今や靜けき閑村、綠翠滴らむばかりの一室に起臥し、索累の身にまつはるなし、滿籟寂々として月、銀の如く、中天にかゝるの時、獨り林間池邊に逍遙すれば、風涼しくして想念轉た純乎たり、此稿もとより隨感隨筆のみ、筆路みだれて秩序を失ふものあれども、完からしめずして筆を絶たむは心なき業なり、則ち例により亂書し去る、机頭の塵埃拂ふにものうく、硯池、水涸るゝや久し、書櫃のうち引據に資するの書なく、空しく題名にそふと能はざるを嘆ず、

知る人は世に多からむ、唯知り給はぬ女性の方々と更に千代が句につきての物語を續けむ、而して先づ平民的の語に就ていはむ、くだ〳〵しとなとがめ給ひぞ、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

人はいふ、俳諧の和歌に對する價値を定むるに、平民的傾向ありとの語を以てするは可なりといふべからず、奈良平安時代の和歌と、江戸時代の俳諧とを比較して觀察し來らば、平民的といふは畢竟その外形論に過ぎずと、これ理あるの言なり、誰か俳諧が平民的なりといへばとて、其内裡に於て則ちその理想に於て淺近卑俗なるものとするの意ならむや、夫れ和歌が因襲、日久しく其弊を積みて小天地に局促したるに反して、俳諧が平易簡潔の姿を顯現したるは頗る時勢の要求に應じたる者ありしなり、玆に於て少かに文字を解して指を斯文學に染むれば、十七有言の短歌は咄々として田夫野人の口唇に上ぼりしなり、芭蕉その他の俳諧のあるものは、時に極めて解しがたきものあれども、これを一括して觀察すれば、俳諧は和歌に比して著しく簡易なるものにてありき、芭蕉等の俳諧は禪に基ゐするもの多し、事の解しがたきふしあると、その餘韻に苦心したると、要するにこれが爲めのみ、若しそれ芭蕉の句を採つて、これを讀めば、往々一語に無限の意味をこめて、はしがきなくてはその何故たるを解するに苦しむものあり、これが爲に後世の人をして漫に臆說を逞ふせしむるに至りぬ、かれの俳句は想高く詞幽なり、去ればかれの俳句を以て直に通俗なりなど云ふは、正鵠を得ざるものなれども、なほその句の最も想高く思幽なるものを採つて、これを和歌に比すれば、其結構、着想一段の相違あるを見るなり、何が故に然るか、いはく俳諧の基礎に於て相違すればなり、その推移の跡に於て相違すればなり、その本領に於て相違すればなり、和歌は萬葉時代に於ては、其規則其範圍いと廣濶にして、後世に行はれたる偏狹、固陋の風習はその浸染するところとならざりしと雖も、遂に變遷し來りて形のみに苦心し、姿のみに拘泥し、その詞は愈〻美しくして、その情は益〻枯槁し、勃々たる生氣、炎々たる活火は消え失せなむとして、わづかに一穗の燈光、風に瞬くが如きを見るのみ、この時に於て、時世の要求は山崎宗鑑を立たしめ、荒木田守武を立たしめ、松永貞德を立たしめ、西山宗因を立たしめ、松尾芭蕉を立たしめぬ、和歌が最も少數なる貴き階級に弄ばれたるとき、俳諧は最も多數なる平民の間に味はれたりしなり、或一派の學者先生と歌人達よりは、卑野なり凡俗なり賤劣なりとまでのゝしられ、其末流は博奕とひとしなみに遊惰の徒の慰

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

さみものと思はるゝまでに至りし所以のもの、其抱擁するところの濶大廣漠にして、粹處と欠處と美處と醜處とを幷せ容れて餘あればなり、去れば平民的文學なりとの語を以て道破し去りたるは、その何人の口唇より出で來りしにもせよ、頗る肯緊に當るものあり、其語の新なるより或は世人の疑惑をその間に生ずるものあるべけれど、われ其語の新なるを嫌はずして、却て面目を道破して餘蘊なきをおもふ、平民的文學の評語は千代の句などに於て著しく正確なるを感ず、素朴にして閑雅なる女性は、その胷中の秘密を吐露して、平々たる一句の裡、無限の波涙をたゝへしむるものいと多し、

起てみつ寐てみつ蚊帳のひろさかな、

夏の夜の月冷やかに蒼桐の樹梢に懸り、唧々として露に鳴く虫の音は、絶えむとして絶ず、寂々、獨り枕を擁す、月見るにものうく、虫聽くにたへず、寐むと欲して閉づる眼は、内にむかつて、ひらき神すみ、情沸きて、亡き夫のおもかげ髣髴たるの情描き出して遺憾なきにあらずや、

蜻蛉つり今日はどこまで行たやら、

といふに至つては、萬斛の紅涙を一小句にこめて、子をさきだてし母の情、悲痛の極、憂愁の極、横溢し來つて讀むにたへず、人を情殺せしむ、古來、俳士幾千人、俳諧幾万句ありと雖ども這般の情緒に至ては殆、他に比すべきはなからむ、情を叙するの短歌界、得易からざるの品、千代が名の薫しきも所以あるなか、

その他煩惱はやないの蚊の如し、菩提は澤邊の螢の如く、招けども來らず、拂へどもさらず、とはしがきして

手に持しうちわを捨て蚊屋の內、

といひ、尼になりし時

髪を結ふ手の隙明けて火燵かな、

といひ、枯尾花を見て決定心を念ふては、

根は切て極樂にあり枯尾花、

といひ、安心を詠じては

ともかくも風にまかせて枯尾花、

といひ、眞如平等を詠じては

清水には裏も表もなかりけり、

といふ。三界一心を詠じては

百生や蔓一すじの心より、

などいふもの、その平素の修養理想を發揮して、いとけだかく覺ゆれども、なほ前二句の眞情を湛へたると何れぞや、はじめこの稿を起すや、思ひのまゝに筆を採りて、まばらながらも捨女、智月尼、秋色女、その他、女俳士の傳記逸事を記して以て、其本領其特相を叙せむと欲したり、然れども事心と違ひ漸く千代が句を紹介するにとゞまりしは、わが遺憾とするところなれども、先づこゝに他日の再考を期して筆を擱かむとす

（完結）

書架

○白痴教育

流竄錄の作者内村鑑三君、初めて白痴教育の事を記述せり。吾黨が之を君に待つこと久し、何んとなれば、此教育に從事したる最初の經驗は、本邦人中、即はち君の有なれば也。

○北京に日章旗を建し後如何

吾軍連りに勝ち、北京城上に日章旗を建てたりとせよ、而して後ち何如んせんとすると。是れ實に民友子近日の卓眼に映ず。經政家尤とも苦心の問題なりとす。此際、誰か、天津と明の遺人とを利用するの大計畫を爲すものぞ。

○雪嶺善罵の新報

東方協會評議員會席上府下知名の教育者二十餘名の目前に於て、朝鮮の改革は教育よりせざる可らず、其教育の改革は我國教育家が潔よく任せざる可らざる所なるを説き、諸教育者大同一致して共に此の義行なかる可らずと慨したるは三宅雪嶺也。彼が之を言ふや、眞摯熱誠血あり、涙ありき、彼何んぞ大事に際して徒らに罵ることをせんや。教育時論、彼が朝鮮教育談を載す。以て其精神の所在を觀るべし。

○南洲翁遺事

川崎紫山、南洲翁遺事三篇を少年園の爲めに筆す、文字簡潔、落々力あり。紫山、尤とも得意の筆。

○正教會の文章

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ニコライ氏を主教とせる、日本正教會の近事、尤とも注目するに足る。正教新報が近頃ろ摘要せる關西公會の議事錄なるものを見るに、議事の鹽梅朴々として何んぞ古風なる。又、皇帝と國家との爲に禱る讃詞を配布し、附言を添へ、吾　帝室に對するの關係を辨ずるは審びらかなり。何んぞ其のつとめたるや。

〇護　教

護教、再たび愛山氏の專任となれるが如し。俄然として生色あり。

〇鼎軒書せず

鼎軒氏、撰擧に爭そひてより、經濟雜誌上、落莫たり。史海は寧ろ之を忍ばん。經濟雜誌、何んぞ平常の顏色なきや。

〇男女共學(Co-education)

男女共學の大學校を卒業したる婦人は、矢張り其子女を男女共學の制度の學校に送るや否や、此の問題を試驗せんとこゝろみしものは、教授マルタ、フート、リロウ女史也。女史が質問に答へたる最多數の答は、皆な無論送るべしと答へぬ。

文しらべ

家康老後の教（完結）

一　惣じて召仕者に何ぞ仕落不調法にて叱り候事其者の能得心致し向後改させ候樣致事主人たるもの丶專一に候我等年若より其事專ら心掛候故異見をくわへ候ものあやまりを改ざる者はなく候兎角いかやうにも人のすたらぬやうに致度事に候先あやまち候者へ其誤候事計り申て叱り候故心得違いたし主人を恨候樣に成行夫迄能く勤候者も不足の心出來て不勤に成て主人もおろそかに成候事全く異見の致方惣じてあしき故人をも捨ると申ものにて候異見の致方は其人を呼出し壹人側に被成候者を置外の者を退け常より言葉を和らげ前に其方はかやうの節何の手柄をいたし何の節能勤候など丶其者の心を悅しめ其後かやうの不調法扨々其方には似合ぬ事とよく〱申聞せ呉々此以後能改前々の通り心付勤候樣に申聞候得ば其理にふくし身の誤りを存分相改め候者にて候只申樣にて捨るとよ

き奉公人に致候との違ひ成り主人たる者は壹人にても能人の出來いかやうの輕き者にても科人の出來ぬ事のみを心がけ身を愼候事專要にて候いかやうの利發の者も主人の目よりは行屆かぬ者にて增て並の者決してぬけ勝の事にてあるべく候其行屆かぬ所は主人より行屆くやうに心付不調法にならぬやうに致し召仕ふ事心掛專一の事に候召仕候者科に申付候者多きは主人の科に候

一 主人の風儀は側廻りに召仕ふ者の風俗にて知れ候物なり側廻りの風俗大切に候上の事下へ知れぬやうに下の事は能上へ知候やうに有度事取はけ氣に入候者風俗心掛肝要の事に候其者壹人にて一家中の風俗變じ善惡有之事に候

一 只人は治世にも徒ら身をうませ候事保養にもあしく何事にても業の無き時は好色其外いろ〳〵の惡事出來候儘朝起るよりふす迄の行儀を定め日々其通りに致し候事に候食事も常に美味計食してうまき物にあらず平日は食物隨分かるき味のものよろしく候月に兩三度は美味食して能よう及承候

一 近年日課を六万べんッヽ唱へし事老人のいらぬ保役にて候へん數へらし候樣皆々申聞候成程へん數へらし候はゝ樂に成可申候得共幼少より戰國に生れて多く人をころし候得ばせめての罪亡しにもなり申候や且若年より一日も隙な暮し候事はなき身ゆへ當世は老づか故隙過てこまり申候何ぞのわざをいたし度候得共夫もいたらぬ事故念佛を日々の稽古事の替りにいたし候ゆゑ毎日朝起いたし夜々早くはやすみ不申おこたらぬやうに心掛候事それ故食事の當りもなくけんごにて候念佛の影とぞんじ候古しへ申傳候に先其人の行儀を正し申さんとおもはゞ平日の起臥刻限と食事の日々の同じ事又過分有之行儀の正不正しれ申候よし左樣に可有事に候惣じて氣丈過候てあやしき事に候勇氣は分てなくてならぬ第一の事に候得共强き者は强きを願て先へ亡び堅きは先へ闕るたとへの通り只柔和大やうにありたき事にて候側に召仕候ものかづに無之樣に可被申付候事

右の趣よく〳〵御申聞せ只直に父母兄弟の申禮儀作法亂れぬやうにくれ〳〵にも御育なされべく候

右の文は國へ御渡し置成人の後も能く〳〵相心得候樣におしへなされべく候かしく

二月廿五日

返す〳〵もくれ〳〵國事隨分御心づけ被成べく右の通りにさへ御育なされ候得ばあんじ申事無之候

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

熊澤蕃山（其一）

駒田信夫

○緒言

誰かいふ、孔孟の學は文運駿々の今日に適せずと。維新以來西洋の文明注入に汲々として、國學漢學は未だ顧みるに遑あらざりしかば、從て甚だ疎畧に流れ、洋學の外必要なる學なき如く思はれたりき。國學の必要なるは今更に喋々するを要せず、漢學もまた、決して近時一部の人の考ふる如く廢物に近きものにはあらざるなり。儒學をなすものは、迂儒のみにあらざるなり。我國、中古以來の德敎は儒學に取りたりし事多きは勿論なれども、近く德川幕府時代の三百年に於て注意すべきもの多し。家康夙に、彼の慧眼を以て成を守る事は學によらざるべからずといふ事を看破し、大に學事を奬勵し（學問所を伏見に建て書籍を刊行し文庫を江戸に設け士民に講書を勸むる等專ら力を盡せり）學者を重ぜし事は遂に幕府の典例となり、特に五代將軍の如き、學政振起に尤も力を用ゐ、遂に元祿時代といふ文學全盛の時期をあらはせり。此の如きものは實に三百年の大平を保てる所以にして、（少くとも其方法の一なりき）又文學の興隆は、家康の功業の一に歸せざるべからず。幕府已に學者を尊重す。其配下にある諸藩の之に倣ふは固より勢の然るへき處なり。皆競うて學者を招聘し、たゞ後るゝを恐るゝ有樣なりき。從て儒學を以て仕途を求るもの多く、特に政敎全く分離せざる當時にありては、其の學を政治に用ゐて偉大の技倆を顯したるもの少からざりき。かの幕府執政の實を得たりし白石を初め、或は幕府に、或は諸藩に、顧問となりしもの屈指に遑あらず。抑も、中古頼朝覇府を鎌倉に開きしより、政權、武人に歸し、武家の世の中となり、從て學事衰へて次第に甚しくなり、王朝時代のさまは影も止めず、北條足利をへて戰亂打續き、次て應仁の大亂となり、實に文學の暗黑時代ともいふべき時期に至り、餘喘將に絕へんとせり。然れとも纔に緇流の手に養はれて、餘命を繫ぎ來りしが、元和偃武の頃には、學者とては、實に曉の星の如くなりき。其曉星の一なる藤原惺窩は、之も元は法師なりけるが、其志す所凡ならず、佛敎を排して儒學を起すを以て自ら任ぜしが、學ぶに師なく、讀むに書なし、慨然身を起して明に航せんとなせり。其薩广の客舍にて、大學朱熹章句を見出せし時の喜びは、如何なりけん。島津日新齋が、程朱の書を藏する事を聞きし時の喜び、はた如何なりけん。是に於て航海を思ひ止まり、研學多年、大に斯學を興し、林羅山其門に出で、益其光輝を發揚し、幕府に大政の疑義を決するに至れり。かくて程朱の學は、いよ〳〵隆盛の運に向へり。次て山崎闇齋は、幕府執政保科正之の顧問となり、野中兼山は、土州山ノ内侯に仕へて政蹟をあげたり。此時に近江の片田舍に帷を垂れて、弟子を導き、江西學の一派をなせるものありき。即はち近江聖人中江藤樹之なり。當時洛閩の學

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

獨り盛なりしが、藤樹は深く悟る所ありて、世の風潮にも拘はらず、陽明學を以て立つに至れり。然れども身、富貴顯達を求めず、隱逸自ら高うせしにより、異學者の批難攻擊を免れたりき。然るに、其門より出でゝ、大なる名望と實權とを負ひし熊澤蕃山の如くにして、朱學派の讒謗を受けざるとは、當時の勢、殆ど許さゞる所なりき。此事は後に至つて詳にすべし。蕃山の事業功績を見ず、漢學の必ずしも迂學にあらず、之を學ぶ人の應用如何によりて、如何なる美果をも擧ぐるに足るとを知らん。

○蕃山の幼時

江戸時代に於て諸藩のよく治まれるものを問はゞ、誰も其一として、岡山の新太郎少將光政の政治をあぐるなるべし。光政は、もとより英明の主なりき。然れども、熊澤蕃山を得ざりせば、かゝる美政は恐らくは擧ぐるに至らざりしならん。龍は雲を得て起ち、雲は龍によりて動く。君臣相俟て共に功名をなしゝなり。千里の馬ありと雖も、伯樂の之を見ることなき時は、徒に野人の手に朽ちん。賢才ありと雖も、之を用ゐるものにして其當を得ざらんには其才は之を顯すに所なかるべし。太宰春臺は、光政に於ける蕃山を評して曰く、「烈公（光政）は不世出の英主なり、熊澤氏を得て任ずるに國政を以てせり、明良の遇實に千載の一時なり」と。

蕃山は、名を伯繼、字を了介といひ、（又了海に作る）、蕃山又は息遊軒と號せり。幼名は左七郎といひ、後、次郎八と改め、又助右衞門ともいへり。元和五年京都五條に生る。父は野尻藤兵衞一利といひ、少壯の折、加藤嘉明に仕へ、後、官を辭して京師に住居せり。後に島原の亂に鍋島侯に屬して戰功をたてし人なり。祖先は尾州の人にて、將監といひしあり、備後といひし人あり。共に織田氏に仕へしと見ゆ。又、母は、熊澤氏にて、名を龜と呼び、熊澤守久の女なり。守久は幼名を喜三郎といひ、後、半右衞門と改む、之も尾州の人にて、父平三郎は德川氏に仕へて、味方ヶ原の戰に討死せしかば、守久は流浪して仕へんとを、求めけり。時に家康、戰死者の後を祿せんとて、守久をも求めしが、居らざりければ、其事止みぬ（此時守久は柴田勝家に仕ふといふ）それより守久は、福島正則に仕へて、足輕の長となりけるが、後、正則、罪を得て其邸、圍まれけり。此時士卒皆にげうせ、義を守りて留まるもの纔に七人なりき。守久も其一人にて、大に憤慨し、力を盡して務めたりき。終に正則配流さるゝに及び、猶從ひて行きしかば、主君の感深く、國士の待遇をなさゞりしを悔ひしとぞ。守久は其後水戸威公に仕へて、旗奉行となり、大に寵を得て終りぬ。

野尻氏、京に寓せし頃は、守久も此地に在りて、蕃山の生るるに及び、故ありて取り養ひしにより、蕃山は熊澤氏を冒すに至れり。守久出てゝ水戸に仕ふる時に、蕃山も伴はれ行きけり。年八才（寛永三年）頃なるべし。幼より物にさとく、志高く、神童のほまれあり。實に旃檀は嫩葉よりの數には漏れざりき。外祖守久の訓練によりて、武道を習ひ、日夜怠らず、業益進むに從ひて、人の知る所となり、終に板倉周防守重昌、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

京極主膳高通の薦によりて、備前藩主池田光政に仕ふることとなれり（此時年十三にして始めに小姓となれりといふ說もあり又十六才にして始て仕ふといふ說もあり）やう／＼君の寵を得て、終に祿三百石の身となれり。儀容嚴肅、嘗て懈怠の風なく、人をして畏敬の念を起さしめたりき。蕃山の幼時實に此の如し。

◎岡山藩に仕ふるより致仕に至る

かくて池田侯の信任益厚く、江戸參勤の折は、必ず供奉を命ぜられけるが、寛永十四年に島原の賊起り、西國の諸侯、命を受けて之を討せしも、容易に平かず。是に於て、池田氏にも討賊の命降りぬ。乃ち明年の春早々江戸を立ちて岡山に歸り、出師の準備をなせり。蕃山、此時年二十にて、未だ加冠の前なりければ、選士に加へられす。江戸に殘されけり。蕃山、之を遺憾として、自ら加冠して、竊に國に歸り、共に從軍せんことを請へり。有司、彼が法を犯せるを以て罰せんとしたりしが、光政は其志を嘉して、罪を問はざりき。已にして島原の賊は平き、師を出すに及ばさりき。

光政は愈、蕃山の性行に感し、將に大に用ゐんとせり。然るに蕃山おもへらく、學、文武を兼ねずして、妄に官に進むは士のなすべき所にあらず、我未だ淺學不文なり、然るに我君は將に大に登庸せんとするもの丶如し。命降りて後に辭するとも、遁れ難し、早く今の間に辭せんには如かじと。乃ち、意を陳して、致仕を請ひ、許されて近江の桐原に退きぬ。光政の容易く其愛臣の致仕を許せしは、蓋し已に其材幹を熟知せるが故に、暫く其志に任せて、之を野に放ち、其伎を磨かしめて後、大に任用することあらんとせしなり。

蕃山常に人の體貌肥滿して進退に自由ならざるを見ては、おもへらく、士たるものは、國の干城なり、苟も緩急あれば身を盡して公に奉せざるべからず、然るに、彼の如く肥滿して進退意に任せず、何を以て其責を盡す事を得ん、人の肥瘠は稟質によるべけれども、又逸樂の致す所なるべし、我亦漸く充肥せんとす、務て防がざるべからずと。十六七才の頃より、寢ぬるに帶を解かず、美味を食せず、酒色を嚴禁して、暇あれば山野に出で丶鳥獸をかり、寒暑風雨を厭はず、又江戸參勤の時には、日夜劍槍を習ひ、宿直の所には、裯笥の間に木刀と草履とを藏めおき、深夜人靜りたる時に、空庭に出て丶、兵法を講習し、或は屋上をかけりて、防火の法を學べり、人稀に見て天狗の誘ふ所となせしとぞ。

◎近江聖人に謁す

職を辭して江州桐原の祖母伊庭氏の家にかくれ、益文武の道を講究せんとせしが、良師なきに苦めり。歲餘にして、又一利に就き兵法を習ひ、勤苦殆と病を成すに至れり。又二十二才にして、初て四書を得て、其素讀をなし、朱子の集註によりて、獨學をなせり。如何にもして良師を得んものと、遂に二十三才（寛永十八年）、笈を負ひて京師に出て丶之を求めけり。然れとも其人を得ず。とかくする間に、中江藤樹の名を聞て、其八月、近江へ行き、其門に入られんことを請ひけるに藤樹、人の師たるに足らずとて辭しけり。切り請うてきかれざりければ、空しく歸り、明年再び行て、終に入門することを得たりき。

此に一話あり。蕃山、京に出でゝ良き師を求めばやと、遙る／＼上り來て、已の師と恃むべき人を求むれども、未だ其人を得ず。空しく旅宿に日を送りけるが、或日つれ／＼なる折、合宿せし旅人語りけらく、某、先頃主用にて二百兩の大金を預り旅せし折、馬を雇ひて乘り、金子は鞍に打結びて行き、日暮になりて宿につきしが、肝要の金、馬に付けたるを打忘れたり。馬子歸りたる跡にて心付き「驚き慌てしが、跡の祭にて取戻すべきやうなく、途方にくれて枕に頭をつけ、打伏し居たりけるが、何時の間にか心も身も疲れはてゝ眠りぬ。夜半にふと目を醒せば、又々金の事、心にかゝり、始の程は夢かとのみ思はれしが、心定まりて見れば、なほまことなりけり。如何にせばよからんと、千々に心を碎けども、更によき思案なし、せんすべ盡きたる上は、死ぬより外はなしと、覺悟はなしけるが、思ひ返せば、天道も我をば見捨てたまへるか、さても不幸の身の上よと、かこち涙にくれける折、いづこともなくほと／＼叩く音聞ゆ。耳をすまして聞けば、まがふ方なき我宿なり、此眞夜中に何人のおとなふにかと、訝しみ、戸うちより問へば、息せはしく、馬子某といふものなりと答ふ。さてはと飛出て見れば、彼れ我忘れたる金を嚢に入れたる儘、取出していふやう、やつがれ、宿にかへりて馬を洗はんとて鞍を解きしに、圖らず、此品を見出てたり、必定、君の忘れたまへるものと心付き、今宵の中に屆け參らせんと、夜を侵してかけ來りぬといふ。其時の余の喜びはいかに、手の舞、足の踏む所を知らず、馬子をば命の親とも思ひ、別に貯十六兩ありしをば、かきさらひ、取出して、聊ながら禮の心にと差出せば、手にだも觸れずして、君の物を君に返すに、何の禮を受くべき故かあらん。されど夜を冒して、之まで來りし事なれば、其料に、二百文受け申さんといふ。某いふには、自らなせる擘よりして、もし汝の義心なかりせば、二百兩は我の、もとより償ひ得る所にあらず命をすてゝ主君に詫ぶるより外、道なかりしに、汝は實に我命の親なり、其恩報ドといふには足られども、聊か心ばかりの禮、先つ受けられよと强ひしに、馬子更にきかず、さらば、此半ばこれ偏に取りれと推しつくれども愈ようけひかず次第に減ドて二兩までにしたれども、馬夫がいふやう、君とな困めたまひそ、やつかれ、守る所侍りと。某感にたえず、今の世に、欲に淡きもの多くは見ず、汝の如く義に因て動かざるものはたへてなし、抑も汝の守る所とは如何なる事ぞと問ふに、かゝる賤しきなりはひして、細々世を渡るもの、いかでか欲なき事あらん、さるに我里に中江與右衞門（藤樹）といふものしりあり、里のものに教へ候、其人常にいはるゝに、誠もておのが身を修め、君に事ふるには忠を致し、親に事ふるには孝を致し、貧しとて濫りなることはせざれ、賤しとて枉りたる事はせざれといふを聞けり。今此賜をうけば、此心を僞るに近からずやと、いひ終りて去りぬ。あゝ澆季の世、かゝる人は又と得がたかるべしと物語る始終、蕃山は耳を傾けて聞き居けるが、やゝ暫くしていふやう、馬夫はもと一鄕の鄙人のみ、道の何物たるをも知らず、利に趨ること鶩の如く、又何の義か思はん、然るに此一話、君子にも愧ぢざる行あるは、之れ必ず教育の致す所なるべし、その中江氏といふ人の德と學とこそ思ひやらるれ、今の世、此人をすてゝ誰にか從はんと。其日直に身を裝ひ、往きて業を門に受けんと請へり然るに、中江氏、人の師たるに足らずとて、固く辭してきかず。蕃山其德を慕ひ、益請うて止まず。二夜其廡下に寢れて去らざりしかば、藤樹の母之を見て、藤樹にいへるやう、人、遠方よりはる／＼尋ね來て、かくまで請ふに、之に汝の習へる所を傳へたりとて、よも世人は汝が好て人の師となるとはいふまじと、是に於て其請をいれて蕃山を見しとぞ（先哲叢談による）

蕃山、藤樹の門に入りし年月に付ては、諸説あり。儒林傳及び先哲叢談には、此時直に弟子の禮を執りし如くいへども、集義外書には二十四歳の時とせり。又一説には、二十三歳の八月、中江氏の許に行きて請ひしに、終に許されずして歸り、其十一日再び往て其邑人淵田氏の宅に寓して頻に請うてやまざりしかば、藤樹も其篤志に感じて許せりといふ。然れども、二十三の時に初て謁し、明年入門せし事は事實なるが如し。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

時報

◎學校、教育

◉第二回女子夏期學校科目表（時宜により多少の變更あるべし）

◉八月三十日　木曜日　午後四時

開校式　司會　雜賀あさ子　東京青山英和女學校
音樂　横濱フェリス英和女學校生徒
聖經捧讀　稻垣末子　横濱聖經女學校
祈禱　小此木忠七郎君　東京明治女學校
音樂
講師及生徒歡迎　矢島楫子　東京女子學院
音樂
演說　巖本善治君　東京明治女學校
仝　星野光多君　フェリス英和女學校
音樂
諸報告　田村武二君　青山英和女學校
讃美歌
祝禱　プース君　フェリス和英女學校

◉八月三十一日　金曜日　朝九時ヨリ　夕三時ヨリ

朝　成瀨仁藏君　大坂梅花女學校
　プース君　フェリス和英女學校
夕　成瀨仁藏君　大坂梅花女學校
　矢島楫子　東京女子學院
　相川勝子　東京女學館

◉九月一日　土曜日　朝九時ヨリ　夕三時ヨリ

朝　植村正久君　東京一番町日本基督教會
　フルベッキ君
夕　成瀨仁藏君　大坂梅花女學校
　竹越與三郎君　東京民友社
　塚本はま子　東京女學館

◉九月二日　安息日　午後四時

說教及晚餐式　本田庸一君　東京青山學院

◉九月三日　月曜日　朝九時ヨリ　夕三時ヨリ

女子教育者談話會
夜七時半ヨリ　文學會
　戸川安宅君
　岩村透君
　其他

◉九月四日　火曜日　朝九時ヨリ　夕三時ヨリ

朝　增野悅興君　東京靈南坂教會
夕　增野悅興君
　津田梅子　華族女學校
　ペンダー女史　東京青山英和女學校

◉九月五日　水曜日

親睦會

◉九月六日　木曜日　朝九時ヨリ　夕三時ヨリ

朝　井深梶之介君　東京明治學院
　松村介石君　東京青年會
夕　德富猪一郎君　東京民友社
　松村介石君
　淺田榮二君　青山學院

◉九月七日　金曜日　朝九時ヨリ　夜七時ヨリ

朝　星野光多君
　田村武二君
　巖本善治君
夜　閉校式

以上

●貧民女學校　大日本婦人教育會長毛利公爵夫人、幹事小鹿島筆子、添田婦人等皇后陛下の令旨を奉し創設したる貧民女學校は追々貧民兒女の入校申込増加し漸次隆盛に赴くを以て今度更に擴張を計り府下各區に一校宛を設立せんとて目下其計畫中なりといふ

●裁縫科の副科(機業)　信州北安松川尋常高等小學校にては今同日本内機業家の希望により同校の裁縫科に機業の副科を設くることゝなり專ら村内有志者に教授する由其の機械は米國「バッターソン」創造の機械にして其の運轉を熟習せば日本在來の機織器よりは五六倍の利益ありといふ

◎美談

●貞婦の賞與　廣島縣に於ては此ほど左の者へ金圓を下賜せり

三次郡君田村志野專稱妻　らく

資性柔順夫專稱と力を戮せ舅姑に事へて孝養厚く舅病沒し姑も亦病を發し遂に聾と爲り起居自由を失ふや夫と交々母を寺院又は劇場に背負ひ耳目を娛ましむる等扶持提携茲に十有八年一日の如し洵に奇特とす仍て其賞として金二圓下賜す

奴可郡西城村赤鬼愛助妻　なつ

資性順良克く舅姑及び夫に事へ夫曾て惡疾に罹り後終に癈疾と爲るや家計益々困難に陷ると雖も毫も屈撓せず專ら手工業に從事し獨力以て藥餌の資に供し且能く夫の嗜好を充たしめ夙夜看護奉養至らざるなく貞節を盡すこと十有八年一日の如し洵に奇特とす仍て其賞として金三圓五十錢下賜す

●又　島根縣に於ては左の者へ賞與せり

石見國美濃郡高津村彥十郞母
吉山きん

平素能く父母に事へて孝順就中父死し母罹病以來家計貧困に陷るも一層意を看護に竭し奉養益々力め其志操を變せさる茲に二十年余一日の如し洵に奇特に付爲其賞金三圓五十錢下賜候事

明治廿七年八月十七日　島根縣知事　大浦兼武

◎片々

●女子の郵便局長　墨西哥國ジャリスコ州にてはヘルモシロと呼ぶ齡二十八歲の一女子を郵便局長に選任したりと東西諸國女子を擧げて郵便の業務に從事せしめ居ることは曾て記したる事もありしが之を局長に薦めたるは墨國を以て嚆矢とす

●故山縣伯爵夫人の遺稿　故山縣伯爵夫人朋子の方が婦德婦藝に一も缺くるところなくて君子の好逑におはせしことは人の好う知り參らすとなるが殊に伯爵の好まるゝに伴れて和歌を嗜まれ其出詠も少なからず、伯は其の中にて秀逸の什を撰ばれ來ん月十二日の一週年忌に梓に上ぼせて靈前に手向けらるゝと聞く、稿の奥に左の一首あり此は伯が襄鬱の當時の詠なるべし

去年は兒に先だゝれ今年は妻にわかれたれは
きのふはともに手向けし物を
閼伽の水そゝきながらも思ふかな　有朋

(東京日々)

●一大風俗史將に世に出んとす　俳壇の老將と仰がるゝ桂花庵桂花翁は室町三丁目の算盤商大坂屋の隱居にて通稱を庄左衞門と云ひ若き時より客を愛して諸藩の壯士に交り有名なる長門の入江九一、薩广の中井弘を始め其他諸方の志士を養ひし事ありしが維新後彈正臺を置れし時諸藩浪士の取締をなすに付ても夫の大坂屋庄左衞門こそ適任なれとて其筋より召出されしが、ど身を風流にすれて之を辭し漂然家を出て京坂の間に身を避け桂花庵桂花と號して籍外の閑人となり壺中の天地に風花雪月を樂みつゝ專ら俳諧を事とし居たりしが其後日本風俗史を編纂するの必要を感し歸京後專心に材料を集め一間に閉籠りて著作に從事せしは今より二十餘年前のとなりしが稿を積み章を重ねて近頃漸く明治の時代に及ぼしたりと聞く因に記す明治時代の風俗は趣味殊に多くして鷲尾隆聚伯が初め福島縣の知事たりし時の如き施政の劈頭にチョン髷へ課税し其稅金は髷一ッに付年稅一圓一家二名以上髷を附くるものは主人以下は從を以て論し其半額即ち五十錢宛を課する事としたる抔細かに書加へあるよしあはれ此書世に出るの後は文學に裨益を與ふること大なるべし

(讀賣)

●長崎婦人會　長崎婦人會に於て內外の篤志婦人より募集したる軍人家族慰安資金總計百三圓九十一錢あり右總額を其まゝ北原市長に附托し同市軍人家族保護會の方法に依り配付されんことを依賴せし由

●濱町婦人團躰　濱町市中の婦女四十名斗り同盟して一團躰を組織し糧食袋或は繃帶布等を製造して獻納するの目的にて專ら勉强中なりと是れが率先者たる者は赤星氏等其重きに居ると云ふ

●土俗會　坪井正五郞鳥居龍三氏等の發企になる土俗會は去る廿日明治義會講堂に於て第二回を開會せり當日坪井氏は同會の問題に關して研究の順序方法を注意し且つ土俗研究によりて得べき利益は

第一、　諸地方住民所業の異同を知り
第二、　如何なる有樣が存在し得べきものなるかとの事を悟り
第三、　風俗習慣の起源變遷を推測し得る

の三項にありとの事を演述したりと我が學者が漸く此種の研究に注目するに至りしは大に賀すべし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

雪子。なぜ？

浪子。よそへ行くから。

雪子。そんなら、いまの手がみが、……

浪子。まア、何んであってもよろしい。またあとで。〔立つ。〕

雪子。いってくれても、いゝぢゃアありませんか？

浪子。また！いゝていったぢゃアありませんか？

雪子。そんなら、よろしい。わたしはア、もう、聽きたくありません。

〔またうめく聲。〕

浪子。あれ、苦るしさうに。早やく行ってやりませう。

雪子。わたしも見まはって來ますから。

〔木のかしら、兩人入る。またうめく聲にて、道具廻はる。〕

(二)おなじく役員休息室の場。

〔本舞台、上手より休息室、下手よきところ壁、がらすの窓二つ三つ。廊下を越えて下手、他の室の窓を見せる。室の正面、上手へよって戸びら、下につゞいて帽子掛、帽子外套などかゝって居る。軍醫甲乙丙丁、立てるもあり、倚子なるもあり。〕

甲。〔ポッケットより時計を出して見て。〕もう四時だ。

乙。諸君、さア、歸いらう。

丙。さア、歸いらう。

丁。志かし、けふの議論、なか〳〵愉快だったなア？

甲。この病院で、あんなことァはじめてゞあらうよ。

乙。さうさ、院長もおどろいて居った。

丙。なる程、柱は獨逸までも行って來た甲斐があるやつだ。

丁。院中で、きゃつはなか〳〵氣骨ある男子、人物だて。

甲。氣ちがひのやうな人間だが、ちっともおそれないやつだわい。

乙。それにしても、位地からいへば、上に立って居る宮城が、なぜ飛んでも無い診斷したのだらう。

丙。矢張り、ほんとの學問やって來たものにャかなはんて。

丁。あんなに哲學をすきなものに、バクテリヤの道理なぞァわかりさうも無いが。—あゝいふ腦髓が欲しいて。

甲。きみャアいつも柱びいきだが、爲めに免職食らってャアならんぞ。

丁。はゝゝゝ！

丙。ならうなら、誰れも長官のさじ加減はうかゞひたく無いのさ。

乙。今日は至たるところ、自分のあたま叩たいて、平氣で食らってる世界だ。

丁。どうしたって、この官吏社會、上に諂つらってるやつァ、しもに對して意張るんだ。

甲。お互に、その意張るやつに意張られるのが、何によりなさけない。

乙、丙。しッ！〔奥より宮城純、みな禮する。〕

宮城。お歸へりですか？

みな。はい。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

宮城。御一所にまゐりませう。
甲。左樣ですか？
〔宮城は外套を着、帽子をかぶる。あとの者は、うしろ指をさしたり、眼を引き合ッたり。〕
乙。すこし天氣はくもッて居りませんか？
丙、丁。なァに、上天氣。
宮城。さァ、まゐりませう。
甲。どうぞ、お先きい。
甲、乙。どうぞ。
丙、丁。さァ。
宮城。それでは、失敬。〔奧より赤木出る。〕
赤木。いまお歸へりですか？
五人。失敬。〔五人入る。〕
赤木。〔ひとり倚子に倚る。〕不斷意ばるあの宮城、けふに限ぎッてすごすごして行くは、なる程、けさ桂とあの議論、こ堪へたのに相違ない。あんなやつは好まないが、しかし、あれもわが長官。
〔奧より桂吾頁。〕
やァ、まだ歸いらなかッたか？―けさの宮城、どうだッた？
桂。〔倚子にもたれる。〕まァ、すこし懲らしたら、よくも成るだらうよ。
赤木。しかし、まるで何にも知らん。
桂。無學なとは、いま更ら知ッたとでァあるまい。
赤木。よッぽどつよくこ堪へたと見える。

桂。さうだらうて。
赤木。いま歸いッたが、すご〳〵して居たわい。
桂。〔おも入れ。〕父のかたき、これしきでは置かぬぞ。―赤木君僕あす一日の休暇をもらッた。
赤木。どこか行くか？
桂。あすは父の周忌なんだ、墓へまゐる。
赤木。どこかね？
桂。父の墓は大淨寺にある。
赤木。あゝ、大淨寺か？〔下手より澁屋雪子、廊下を通り過ぎる。〕
桂。きみ。〔指さす。〕
赤木。あれが澁屋雪子だな？
桂。〔微笑〕きみァ知ッてるでァないか？〔赤木きのわるさうなこなし。〕上田とは親たしい。
赤木。だが、きみ、ほんとかねェ、上田孃を慕たッてるのは、…
桂。誰れが？
赤木。宮城がさァ？
桂。なァに、それァあうそだらうて、きみ。向ふで、よし、慕たッたとてさ、きみ、―まァ、よく考がへて見たまへ、妻がある身で無いか？
赤木。さうさ、僕はたゞ人より聞いた通りいッたのだ。
桂。それァ、きみ、上田孃には見識があるわい。
赤木。まかし、宮城が自分のつまをきらッてるのはほんとだ。
桂。きらッたにしろ、嫌らはんにしろさ。〔時計を出して見て〕

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

公園をすこし散歩して歸いらう。〔立つ。〕

赤木。それがよからう。〔立つ。〕何んしろ、けふの議論〔木のかしら〕

兩人。愉快だッた。

〔兩人外套帽子を取る見えにて、道具まはる。〕

(三)公園小山の塲。

〔本舞臺すべて木の繁げッた小山の躰、腰かけ二つ三つ。仕出し三人腰かけて居る。〕

一。どうも、こゝろ持ちがいゝ、毎日苦るしい目をして、こいやッて來ると、さッぱりすらァ。地獄から極樂へでも飛び脫けたやうだ。

二。ちげェねェ。お上もなか〳〵氣がきいて來たわい。

三。しかし、このごろの不景氣にャァ平口だねェ?

一。しかし、こちとはくちがあるから、いゝでャァねェか?

二。まァ、どうやら、斯やら、まごつかねェが。

三。けェッて、かゝァにがみ〳〵いはれるにャァ平口だ。

一。それャァ手めェばかりさ。おいらァぐづ〳〵ぬかせャァ、ぢきに一とつ食らはせてやらァ。

三。やッぱり、となり近處の厄介でャァねェか? 喧嘩の駄賃でも取れゝャァいゝが。

二。かゝァを胴づいておわしが取れゝャァ、これほど氣樂なよァねェ。

一。まさか、こじき坊主の木魚でャァあるめェし。

三。これャァおもしろい。

みな。はゝゝ

〔下手より軍醫山口進、軍人田邊政信、かたわらの腰かけにかける。〕

一。それャァさうと、おい、けふの女は花だなァ?

二。ぞッとするほど、器量がいゝや。

三。あれャァさうさ、慈善病院のすてきなやつだ。

一。あゝいふをんなが抱いて見たいて。

二。それャァおわびのかた思ひさ。

三。あすこァお上の建てた病院で、貧乏人はたゞで入院させてくれァ。

一。それャァあり難てェが、あの女にいち度看護してもらいてェな。

二。馬鹿ァいゝねェ。こちとのやうな貧乏人を、助けてくれる女がみとおもへ。

一。そんなら「がシけのつゝじ」だな。

二。「およびなきゆゑ、……

皆。見てくらす」だて。

山口。きみ、暫らく逢はなかッたが、どうして居る?

田邊。矢張り、相變らずだ。

一。さァ、もう、けェらうよ。

二。のろけてェても仕かたがねェ。

三。けェッて、かゝァでも胴づく方が、よッぽどましだ。

〔三人捨ぜりふにて下手へは入る。〕

田邊。きみの病院のうはさでャァないか?

山口。さうさ、困まるんだて。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

田邊。　あゝいふやつァ、もう、仕かた無いもんだて。

山口。　さうさ、駄目ださ。

田邊。　どこにでも、あるもんだが。

山口。　こればかりは、さじ加減ではいかないし。

田邊。　僕のやうなものァましてだ、劔を振りまはしたッて仕かたがない。

山口。　やッぱり、道德家にまかさうか？

田邊。　さうさ、それが十九世紀の分業法さ。

〔下手より、入れずみ勘太、竊かに山口を招く、山口向ふへ行けといふこなし。勘太まくッた腕をたゝいて、この入れずみを見よがしの意氣。〕

勘太。　おやかた。

山口。　これャ。何んだと？——きみ、ちョッと失敬。〔田邊にこゝろして、立ッて行く。〕うぬ、向ふへ行け、馬鹿野郞！

勘太。　ヘン、そッちがさうなら、こッちも入れずみ勘太だ。いくらァいまァ出世したッて、もとァおれのおやかたでャァねェか？昇ぼるも落ちるもおれのくち次第だ。そッちの爲にもおもッてやれャァすこしャァこッちの賴みも聽いてくんねェ。——おやかた、こないだから賴んだかねャァどうだね？

山口。　それャァ、やらねェでもねェが、いまァ持ッてるもんか？

勘太。　そんなら、いつくれるんだ？

山口。　あすの夕かた來るがいゝ。

勘太。　うそでャァねェか？

山口。　そとこだ。——早やくけェれ。

勘太。　それでャァ、きッともれェに行きますぞ、おやかた。——わッちもおやかたの爲めェおもッて、何にもいはねェのだから。

〔勘太下手へは入る、山口もどる。〕

山口。　失敬しました、田邊君。仕かたが無いッて、あんなものァ。

田邊。　何んだね？

山口。　あれか？あれはね、僕が東京へ來たはじめ、召しつかッたものさ。いつも無心にャァ困まるッて。

田邊。　義理も何にも知らんやつァ、どこい行ッても厄介だて。——それはさうと、山口君、桂吾艮とかいふ人物は、ちかごろ獨逸から歸いッて、きみの病院ではなかなか學者ださうだし、きびしいてねェ？

山口。　なァに、あれャァ、哲學だとか、へちまだとか、何んとかかんとかひねくッて、くち先きだけ立派だわい。あんな氣ちがひが居ては、きもだまちくちくさゝれるやうで、困まる

田邊。　志かし、あの風彩、質素で、なかなか猛けしい。

山口。　あれもをんなの爲めださ。

田邊。　をんなの爲めて？

山口。　それャァきみ、柔弱なやつもいつはッて、をんなの氣嫌取る爲め、活潑に見せる。それャァ丁度、ぬすとなどが出世して、まじめになるのとおなじとよ。

田邊。　えらい精はしいねェ？

山口。何にをさ？

田邊。何んしろ、そんなら、いろがあるんだね。

山口。さうさ。

田邊。しかし、桂にゃアいひ名づけがあるんだぞ。

山口。そんなとァ知らんが、おもひおもはれてるんさ。

田邊。きみ、何んといふをんなだ？

山口。いまのうはさのやつよ。

田邊。誰れだ？

山口。上田浪子といふやつ。

田邊。なに、上田？

山口。きみゃァ知ってるのか？

田邊。もち論。あれゃァ、きみ、桂といぬねこのやうな宮城が惚れてるでゃァ無いか？

山口。なに、宮城が？——それゃァ、きみ、どこでそんなと聞た？

田邊。僕ァある人から聞いた。あれのあねは、きみ、子爵片桐へ行ってる。

山口。片桐！——それゃァ、きみ、僕が居ったところだ。それでゃァ、きみ、あいつもかったいだぞ。

田邊。癩病？どうして？

山口。それはかうだ。僕があすこに居ったとき、あれがあねなら癩病で、それが主人にわかってさ、——それも、兄がフランスでくづれたから、知れたんだが、——出來た子まであはせていへ牢に押しこめられ、つひにうらみ死にをしてしまった。

田邊。それだから、あれも美人なんだね。——志かし、きみがあすこに居ったとは奇妙だねェ？

山口。なぜ？僕も人間ださ、どこにもちがったとこァ無い。

〔いやにからだを見まはす。〕

田邊。は、、、

山口。しかし、きみ、宮城が惚れてるのァほんとか？

田邊。うン、それゃァちがい無い。

山口。却って中に居る僕らは、ちっとも知らねェが、——志かし、いゝ議げんのたねだなァ。

田邊。なに、いゝ懺悔だ？

山口。いやさ、いゝ訕謗をされたものだて。

〔向ふ揚幕より桂吾良と赤木此馬。〕

赤木。きみ、かうしん〳〵してゐるとこはこゝちがいゝねェ？しんとする、上野の奥も閑静だが。

桂。志かし、いまに、どれもこれも俗化してしまうから。

〔すゝむ。〕

山口。やって來たぞ。

田邊。うン、やって來た。〔桂赤木舞台に來たる。〕

山口。やァ、きみ、日本のレッシング君。

赤木。失敬。

山口。桂君、まァこし掛けたまへ。

〔兩人はさなりの腰かけ。〕

桂。きみ、まァ、向ふを見たまへ。

赤木。けふはよく晴れてるねェ。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

山口。格別ですなァ？
赤木。よく見える。
山口。桂さん、けふはなか〳〵あッぱれでした。
桂。ふッ！
山口。何んしろ、宮城はまるでわからん。
赤木。まァ、兩虎相たゝかッたのだ。これで、あとの人らが目をさませばいゝ。
山口。ふゝン、乞ふ、槐よりはじめだ。
赤木。なに？
山口。いやさ、兎角人はくちが早やいて。
赤木。きみがゝ？
山口。誰れでもいゝ、ほッとけ。人が柔弱になッたのも、かッたいのをんなにまよッてる馬鹿ッつらにくッつくからだ。
赤木。山口君、それャァなにを？
山口。何んでもいゝさ。――さァ、田邊君、歸いらう。
田邊。さァ、歸へりませう。〔立つ。〕
赤木。お歸へりですか？
山口。こゝで、おさまたげはいたすまい。〔立つ。〕
田邊。失敬。
桂、赤。失敬。
山口。これャ失敬。さァ、歸いらう。〔すこし行いて、振りかへる。〕あとで、おのれ、へこたるな。〔兩人は花道へかゝる。〕
桂。あんなあくた見たやうなものァ、相手にしないがいゝ。
赤木。それャァ、きみ。しかし、まァ、同僚だからねェ。

〔向ふ揚幕より、森民子と侍女お松、花道にて、山口、田邊とすれちがふ。〕
田邊。きみ、見たか？あれが、きみ、桂のいひ名づけださうだ。
山口。あれが？――うン、またいゝ訕謗のたねが。
〔兩人はあげ幕へ、兩人は舞台。〕
お松。あら、吾良さんが、おほゝ、誰れかとおもッたら。
桂。おゝ、民子さん、どこへ行ッたの？
お松。これはおめづらしいこと。いま、あなたのお父さまのお墓へお詣りいたしまして、歸いりがてらお孃さま、お氣ばらしに、こゝまでおいであそばして。
桂。それは御苦勞でした。まァ、お掛けなさい。
お松。はい、ありがたう。おそくなりますと、おッかさまが御心配あそばしますから。
桂。わたしも、あす、詣ります。
お松。あの、お墓へ？
桂。詣りに。
お松。あ、左樣ですか。それでは、お父さまも草かげで、さぞおよろこびあそばされませう。
桂。民子さん、勉强しますか？
民子。いえ。〔ほろり、うらみのこなし。〕
お松。お孃さまは、このごろ、すこしおふさぎあそばして。
桂。それはどうして、民子さん？をんなは胸がちいさいから、あまり心配せんのがいゝ。
お松。それでも、をなごですから。――さァ、お孃さま、歸いりませう。――あなたはどうぞ御ゆッくり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女学生募集

校舎寄宿舎新築落成來九月廿一日開塾
輝子夙に女子の教育に關し見る所あり曩に米國に航し尋て歐米各洲を歴遊し實に九星霜を費し親しく女子教育の實況を視察し得て大に啓發する所あり今や當初の素志を實行せん爲め茲に一校舍を創設せり本塾の期する所は專ら益實を旨とし女子に必要なる學術工藝を學ばしめ家庭の事を練習し以て一家に主宰たるべき女子の本分を修養せしむるを以て主眼とす冀くは大方の諸彥最愛の令孃をして來學せしめられんことを●規則書は應需遞送す

東京麻布仲町拾壹番地　倚松園女塾

塾主　園輝子

文學界

第二十號　八月三十日發兌

清少納言のほこり　天知
流水日記（完）　孤蝶
三日風流（下）　禿木
迷夢　鷗水
おばふね　朽葉
蕪村句選
其他時文には實利主義及道德主義（其一今の基督敎）○けふこのごろ○蓮の露○其他新刊の評草々

發行所　下谷三輪町八十九番地　文學界雜誌社

發賣所　神田表神保町六番地　女學雜誌社

評論

第二十七號　八月十五日發兌

臨機高嘯
一大時機を觀る
眼前の熱動
大才出づるの機會
達人は至寶なり
大才須らく山を出づべし
英語及び日本語
維新の大事業

日本人外國傳道の聲
日本は大國なり
南洲先生を景慕す
深谷大澤原地を遺せ
英魯何れか心友
來るべき機會

偉人物
十四頁の一大長論文

岐阜縣治水大策

精緻の表一葉あり

發賣所　女學雜誌社書店

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●生徒募集● 規則書は申込次第遞送す

一本校今回小學科、本科、高等科の各學級に入學を許す、志願者は九月十日までのうち來校あるべし

一本校は毎年本科一學級以上に數名の校費生を募る（試驗の上）

横濱山手 フェリス女學校

明治女學校生徒募集

普通二年級へ（小學高等科卒業相當の者）廿名、同三年級へ十名、高等文科一年級へ五名入學を許す志願の者は九月十日迄に申出べし●小學全科卒業の者は入校后三年にして普通科を全了するを得●學資は授業料毎月一圓二十錢寄宿料一切三圓八十錢圖書費凡そ一圓乃至二圓程とす

東京麹町區下六番町六番地 明治女學校

女生徒募集

一本校の普通學部は高等科普通及ひ豫備科より成る又別に職業部を置く但し來學期には築地海岸學校は本校に合併すへし

一寄宿舍は百事完備す

一入學試驗は九月十一日午前九時

一規則の入用あらば御報知次第送呈すへし

明治廿七年八月

東京市赤阪區青山南町七丁目 東京英和女學校

女生徒募集

本校は九月十一日次學期始業豫科本科共入學を許す小學尋常科以上の學力ある者は豫科に入學するを得●規則書を望む者は郵券貳錢を送れ

東京芝區三田功運町卅番地 私立 普連土女學校

神戸女學院生徒募集

本院九月十二日始業豫備普通高等の三科共其學力に應し入學を許す有志者は九月上旬迄に御申込あるべし

神戸市山本通四丁目○舊英和女學校○神戸女學院

仙臺市 宮城女學校生徒募集

新教員二名を增し益々内部を整頓し入學者の便益に備へり九月十日迄に入學許す

女學雜誌前號要目

朝鮮開導論 是れ久しく朝鮮に在りて、大院君を熟知し、多年半島の開導に掛慮せし士人の立説たり。宜なる哉、着眼警抜にして、所論世表に卓出することや。

魂迷月中刄（悲劇） 深人淺語なく、稀作妙句多し。此劇初めて文壇に登る年少文士が數年の結構より成る。意匠滲濟、經營辛酸をつくす。世上濃厚の人少なからず、請ふ審らかに讀味して其眞を揣せ。

合同義捐の道 前號 五箇の逸事の主人某氏が、聖經の一奇跡に與へたる新解釋に筆を起して、五パン二尾の魚の能く五千人を飽かしめたる聖旨を學ぶ實に目今の時教。

廣告料及無料廣告

一行 一回 前金十錢 （廿七字詰）
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。
但し不道德なる廣告は謝絕す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記録を揭ぐるものにして一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部注文を要し以上半部增さ定む。

本誌代價

冊數	定價前金	市外定價郵稅共
一冊	金六錢	金六錢五厘
十冊	金五十八錢	金六十三錢
廿六冊（半ヶ年分）	金一圓四十三錢	金一圓五十六錢
五十二冊（一ヶ年分）	金二圓六十錢	金二圓八十六錢

發行所 東京府北豐島郡王子村下十條八百五十一番地 女學雜誌社
編輯兼發行人 巖本善治
印刷人 堀口庄三
發賣所 東京市神田區表神保町六番地 女學雜誌社書店

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地秀英舍工場印刷（電話十九番）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY